

経営状況分析のしくみと留意点 ④ 流動性分析指標(その2)

はじめに

まず、必要運転資金月商倍率についての訂正です。前回、同比率について「値が高い方が得点が高い」と記載しましたが、「値が低い」方が高得点になります。お詫びして訂正いたします。

改訂版を皆様にお送りするとともに、ホームページにも訂正版をアップしておりますので、ご確認願います。

今月は流動性分析の2回目です。立替工事高比率と受取勘定月商倍率を解説してまいります。

例によって、文中の意見にわたる部分は私見であることをあらかじめ申し添えます。

1. 立替工事高比率

$$\frac{\text{立 替 工 事 高}}{\text{売上高+未成工事支出金}}$$

分子の立替工事高は、[受取手形+完成工事未収入金+売掛金(厳密には「その他の営業債権」)+未成工事支出金-未成工事受入金]になります。立替工事高は、必要運転資金の算式のうち、支払勘定[支払手形、買掛金、工事未払金の合計]を控除しないものと考えていただければよいと思います。

分母は、[売上高+未成工事支出金]です。売上高には、完成工事高以外の売上高も含まれますので、注意が必要です。また、分母、分子に未成工事支出金は含まれていますが、それ以外のたな卸資産は含まれませんので、ご留意いただく必要があります。

立替工事高比率の数値は低い方が高得点になります。

立替工事高比率は、ちょっと理解しにくいかもしれません。まず、前月に解説した「営業循環」の私なりの定義を再掲します。

営業循環とは、通常の営業の過程で、「現金・預金」が、⇒「原材料」⇒「未成工事支出金・仕掛品」⇒「製品・商品」⇒「完成工事未収入金・売掛金・受取手形」と資産の形を変えて行き、最終的に「現金・預金」として戻ってくることを言います。

立替工事高は、この営業循環の過程の中で、

『現金が出て行っている状態』を示します。つまり、建設工事が始まって、完成引渡しを行い、現金・預金として回収される直前までの状態にある資産の金額を示します。これがすなわち『立替』工事高です。

一方、分母の[売上高+未成工事支出金]は、建設工事が終了し売上計上したものと、建設工事が終了していない状態のものとの合計であり、言い換えると、当該会計期間に循環している現金・預金の総額とよいと思います。

つまり、『立替工事高比率とは、会計期間における営業循環の総額のうち、期末現在に現金が出て行っている状態の金額の割合を示すもの』と表現できるかと思います。

2. 受取勘定月商倍率

$$\frac{\text{受 取 勘 定}}{\text{月 商}}$$

分子の受取勘定は、[受取手形+売掛金(厳密には「その他の営業債権」)+完成工事未収入金]で、売上債権と言い換えることができます。

分母の月商は、売上高を12で除したもので、月平均の売上高です。売上高には、他の比率と同様、完成工事高以外の売上高も含まれます。

受取勘定月商倍率の数値は、低い方が高得点になります。

この比率は、より一般的には売上債権回転期間と呼ばれるもので、売上債権が現金及び預金として回収されるまでの期間を示します。売上債権回転期間の値がちょうど1だった場合、すなわち、受取勘定の金額と月商の金額が等しい場合には、売上から回収まで、平均1ヵ月かかることを示しています。

おわりに

今回解説した立替工事高比率は、一般的な経営分析にはない、建設業特有の分析比率といえます。

概念的には、『そんなものか』と思っていただく程度でよいと思いますが、それぞれの算式に、何が含まれて、何が含まれないかは、しっかりとご理解いただきたいと思います。

(取締役 公認会計士・税理士 矢島和彦)